

N

NEWS  
LETTER芝浦工業大学  
教育イノベーション推進センター  
ニュースレター

VOL. 10

発行 / 芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター

## Contents

2

FD・SD講演会

「カリキュラム評価の意義と方法」

大阪大学  
佐藤 浩章

FD・SD講演会の主旨と概要

FD・SD推進部門 部門長  
榊原 暢久

3

ICED Conference 2018

参加報告

教育イノベーション推進センター FD・SD推進部門  
奥田 宏志

4-5

授業における創意工夫

工学部 電子工学科  
小池 義和・横井 秀樹・加納 慎一郎

6

Scomb利用事例紹介

ワークショップについて

システム理工学部 数理科学科  
石渡 哲哉

7

シラバス・授業デザインWSに

参加して

麻布大学・学長補佐(教務・新教育プログラム担当)  
関本 征史デザイン能力を育成する授業設計  
ワークショップに参加して東洋英和女学院大学 国際社会学部国際社会学科 専任講師  
町田 小織

Workshop for Teaching

Subjects in Englishに参加して

国際基督教大学 特任講師  
恒安 眞佐

8

2017年度

優秀教育教員顕彰について

2017年度優秀教育教員顕彰選考委員会委員長  
木村 昌臣(工学部 情報工学科)

2018年度

教育イノベーション推進センター

主催/共催 研修および講演会

## 「理工学教育共同利用拠点」の継続認定

FD・SD推進部門 部門長 榊原 暢久

本学・教育イノベーション推進センターは、2018年9月に文部科学大臣より、「理工学教育共同利用拠点」(大学の教職員の組織的な研修等の実施機関)として継続認定(認定期間:2019年度~2023年度)されました。継続認定にあたり、学内外の教職員の方々から多くのご支援を頂いたことをこの場を借りて御礼申し上げます。

本拠点では、理工系教員に必要な教育能力開発プログラムの体系化を目指して、教育・研究・マネジメントの3領域のプログラム開発・提供をしており、2018年度には19プログラム(+学内限定5プログラム)を実施しました。加えて、「工大サミット」等のセミナー・シンポジウム、全国のFD・SDに関わる拠点が集まる「大学教育イノベーション日本フォーラム」、他大学等に対する相談対応、他大学等への研修講師派遣を実施しました。学外に公開されている19プログラムを以下のように運営することで、本拠点プログラムを定常的に実施する体制ができています。

- 14プログラムは拠点認定後に開発・実施
- 17プログラムが内製化
- 10プログラムを学内のFDer 3名で担当
- 8プログラムのプログラム開発を支援



2018年度の参加者は6割程度が学外者で、おおむね90%以上の満足度を得ています。満足度だけでなく、意識・行動変容についての調査結果も取りまとめ中です。

継続認定にあたり、「理工系に特化した新たな研修内容や教育手法の開発」、「我が国の理工学教育の強みを伸ばし、弱みを克服する方法

の明確化」、「研究・マネジメントの能力開発プログラムの充実」、「成果分析や評価の適確な実施」について留意するよう指摘を受けました。これらの指摘については、新たなプログラムを追加するだけでなく、既に実施されている取り組みの提示の仕方を見直すことでも対応していきたいと考えています。留意事項以外では、一定時間の初任者研修を義務化する大学が増えつつあるので、拠点プログラムに参加した実績を教職員の評価に反映させる方法もまだまだ改善しなければならないでしょう。人員・予算面での安定的な拠点実施体制の構築も必要です。



2019年度もいくつかの新規プログラムを追加する予定です。また、単発のシンポジウムや講演会、他大学等に対する相談対応、学外からの依頼による講演およびWS研修も引き続き実施します。多様な学科・学部・大学の教職員の方々と、現状や課題について共有しながら学ぶことのできる本学拠点プログラムは皆さんにとって実り多い機会となるはずですので、非常勤講師・ポスドクの方々を含めて、興味のあるプログラムがありましたら是非ご参加ください。プログラムに参加される方々の中から本拠点のファンを増やしながら、ホスピタリティをもって今後も拠点運営をしていきたいと考えています。



## FD・SD講演会

### FD・SD講演会「カリキュラム評価の意義と方法」

大阪大学 全学教育推進機構 教育学習支援部 准教授 佐藤 浩章  
(本学理工学教育共同利用拠点運営委員会委員)

カリキュラムのPDCAサイクルは、カリキュラム評価のステップを経ることで、一度完結します。カリキュラム評価は、外部評価のために行うものではありません。何よりも学生と大学のために行うものです。だとすれば、学生や大学を少しでもよりよくするためのアクションに繋がるような評価を行う必要があります。GPA、取得単位数、就職状況も、カリキュラム評価の一部ではありますが、それだけでは不十分で

す。学修到達目標に沿って、学生の力がついたのでどうかを測定することで、アクションに繋げることができます。本講演では、評価主体、評価時期と回数、評価基準、評価方法、カリキュラム評価ポリシー、カリキュラム評価を活かせる組織デザイン、カリキュラム評価の日常化について、基本的事項を解説します。

#### FD・SD講演会の主旨と概要

FD・SD推進部門 部門長 榊原 暢久

2017年にディプロマ・ポリシー (DP)、カリキュラム・ポリシー (CP)、アドミッション・ポリシー (AP) という3つのポリシーの策定・公表が義務化されましたが、策定・公表がゴールではなかったはず。予算・時間・マンパワーの制約が厳しい中、学生に提供しているカリキュラムの評価を適切に実施することで、より効果的に学生を成長させることができます。カリキュラム評価にはそのアセスメントポリシーが必要で、私立大学等改革総合支援事業でもアセスメントポリシー策定が指標の1つに加わりました。例えば、「機関レベル」・「教育課程レベル」・「授業レベル」の3段階で、「入学前・入学時」・「在学中」・「卒業時・卒業後」について、どんな評価をするかを定めることがこれにあたります。

カリキュラム評価をする際には、「目標設定」・「情報収集」・「改善の取り組み」という順序で進めていきますが、本学ではDPをさらに詳細化した学修・教育到達目標が各学科で策定されています。学修・教育到達目標とカリキュラムが適切に対応しているか、そのカリキュラムで学んだ学生の学修状況がどうなっているか、等についての情報収集を行い、改善の取り組みを回すことが当面の課題です。その際、既に多く存在する学生の学修成果を有効に使い、評価をシンプルに行うことが必要です。

学生の総括的な学修成果の代表的なものとして卒業研究があります。本学では、卒業研究に関するルーブリックが

各学科で策定されています。カリキュラム評価では、卒業研究を含めた学修成果に対する評価が厳密で客観的なものになっているか、評価の妥当性をどのように検証しているか、が問われています。

これに続く改善の取組としては、「カリキュラム等の変更」・「方針・財源・組織計画等の変更」・「教職員の能力開発支援」があります。大学基準協会が実施した調査によれば、以下が明らかになっています。

- 学生調査やシラバス点検は実施率・改善への寄与率ともに高い(80%強)
- 専門家による外部評価の実施率は低いですが、改善への寄与率は高い(90%弱)
- GPA分析は改善への寄与率が比較的低い(60%程度)

また、カリキュラム評価に関わる論点としては、「正課教育以外の課外教育・準正課教育についても評価すべきか」、「意欲・関心・態度等の測定しにくい能力・資質の成長を評価すべきか」、「すべての能力を伸ばすのか、部分に特化しても良いか」があります。

最後に、カリキュラム評価には、個別データの収集だけでなく、データを如何に統合・分析し、意思決定するかというシステムが必要です。本学の場合、このシステムを強固にすることが急がれるのではないのでしょうか。



# ICED Conference 2018参加報告

教育イノベーション推進センター FD・SD推進部門

奥田 宏志

2018年6月に米国ジョージア州アトランタで行われたICED (The International Consortium for Educational Development) Conference (以下、ICED) 及びICED Council Meetingに参加しました。ICEDは米国のPOD Network (Professional and Organizational Development Network in Higher Education)、英国のSEDA (Staff and Educational Development Association) 等、各国の「高等教育開発者」達から構成されている組織の連合体です。ICEDの参加者は、31カ国から350名の規模となりました。



参加者数は、米国 (159名) が最も多く、次いでカナダ (20名)、スウェーデン (17名)、英国 (16名)、中国 (14名)、ドイツ (12名)、南アフリカ (11名) と続きます (日本は11番目で7名)\*。南アフリカからの参加者が多い理由は、2016年に南アフリカでICEDが開催されたことによると思われます。またICEDのプログラムにおいてPaper Sessionの数が116と最も多く、次いでWorkshopが55、Poster Sessionが36となっています\*。Paper SessionやWorkshop等の内容は多岐に及びますが、日本との大きな差を感じることはありませんでした。今後、こうした各国の高等教育開発者が集まる場において、日本のFDの取り組みについて発信し、情報交換を行う必要性を強く感じました。

今回のICEDで印象的だったことは、高等教育組織の代表レベルから20歳台の若手研究者が中国から多く参加していたことです。アジアでは2012年にタイでICEDが開催されましたが、中国はタイに続き将来ICEDの自国開催を計画しており、事前視察を兼ねているようでした。2020年にはスイスでの開催が決まっており、アジアのみならず、多くの国々で「高等教育開発」が注目され始めていることが分かりました。

次に、Council Meeting (各国の高等教育開発者団体の代表者会議) にオブザーバーとして参加し、各国の高等教育関係者との意見交換を通して日本と各国の共通点と相違点を知ることができました。高等教育におけるグローバル化が進み教員や学生が流動的になりつつある中で、ヨーロッパ、北米など「高等教育開発」先進国の事例を参考に、アジアやアフリカ、南アメリカ各国が動きだしていると感じました。2016年に米国のPOD Conferenceに参加した時と比べて、アジアでの「高等教育開発」の動きは速くなっていると思います。今後は、アジア各国と高等教育開発の取り組みを共有し、情報発信していく必要があると強く感じました。

(\* ICED2018 Complete Final Reportより引用)

# 専門科目「電子工学国際インターンシップ2」における タイ・日本間の双方向グローバルPBLの実施

工学部 電子工学科 小池義和 横井秀樹 加納慎一郎



小池義和先生



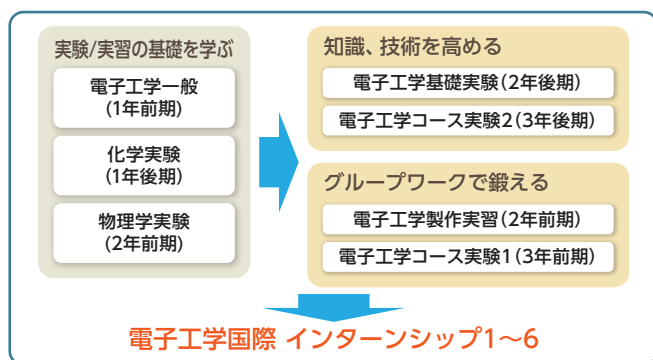
横井秀樹先生



加納慎一郎先生

## 専門的デザイン課題解決能力と チームワークを育て、国際経験を培う

「電子工学国際インターンシップ2」（専門科目、選択、2単位、主に3年次学生対象。以降本PBLまたはプログラムとします）を紹介させていただきます。本学科ではこれまで実施していた測定技術、説明能力を育成する実験科目（電子工学基礎実験、電子工学コース実験2）に加えて、エンジニアリングデザイン能力を育成する科目の整備を進めており、1年生の電子工学一般から始まり、電子工学製作実習、電子工学コース実験1につながるカリキュラムフローの構築を進めています。PBL科目では、A～Hまである電子工学科の学修・教育到達目標の中の「E：専門的デザイン課題について、解決する能力を身につける」、「H：専門的課題について、グループの一員として行動し、解決する能力を身につける」を異文化の環境で達成させることを目標としています。特にここ数年は、学科教員の努力のもと電子工学科のPBL科目（電子工学国際インターンシップ1～6）が充実してきており、PBL科目で学生に対する教育効果を高めるために3年生の電子工学コース実験1、2（必修）の内容を大きく見直しています。



▲図1 電子工学科の実験実習科目のカリキュラムフロー

本PBLは電子工学科で用意されている他のPBL科目と異なり、相手側の大学に電子工学科の学生が訪問するだけでなく、相手側の学生も本学を訪問して、同じメンバーでPBLを続けることが特徴となっています。また、2017年度からは工学部で新たに設置された受入型グローバルPBL（工学共通系教養科目、選択必修、2単位）で受入の実施が単位認定されており、参加者は合計4単位が認定されるようにしております。



▲2018年のPBLメンバー

## タイと日本の双方向に行き来し 環境を変えてPBLを実施

本PBLはこちらからの呼びかけにより、2016年にタイ・キングモンクット王立工科大学トンプリ校（KMUTT）の Electronics and Telecommunication Engineering (ENE) 学科と開始し、2018年度で4回目を迎えます。最初の呼びかけ時は詳細なところは詰めておりませんでしたでしたが、KMUTTの Rardchawadee Silapunt先生（通称Ann先生）から双方向での実施の要望がだされ、大枠が決定しました。2018年は芝浦とKMUTTの大学からそれぞれ11名（全22名）の3年次学生が参加して実施しており、同じメンバーがそれぞれ10日間前後、両国間を行き来し、環境を変えて取り組む内容となっています。参加者はタイと日本の学生がほぼ同数で4名（一部5名）のチームに分かれ、全部で5チームに分かれるようになっています。

本PBL全体のスケジュールを表1に示します。募集は他の電子工学科PBL科目にあわせて各プログラムの担当教員の講義内で紹介を行い、募集要項を配布し、参加希望者は担当教員にメールで連絡します。本PBLはここ2年では定員を超える応募がありました。定員を増やすことは他のPBLの参加人数に影響が出るため、学科ホームページで公開している「電子工学科gPBLポリシー」に沿ってほぼ定員の人数で参加者を決定しました。ただ、選抜は成績が重視される結果となっています。これに対してKMUTTでも開始当初から応募者が参加定員を超えていますが、一人30分程度の面談を行い、成績だけではなくプログラム参加に対する熱意も考慮して選抜



4月上旬	芝浦工大PBL参加者決定
7月下旬	芝浦工大側チーム分け
8月中旬	各大学内で各チームでProject planを作成、提出。 両校でProject plan交換。本学とKMUTTとで 混成チーム結成のための交渉
8月下旬	KMUTTと本学の混成チーム決定
9月上旬	KMUTTでPBL実施。プロジェクトのテーマ、 実施計画決定、前半の実施、中間進捗状況説明、 デモンストレーション
10月	各大学でプロジェクトを進める
11月上旬	本学でPBL実施、工場見学、Field Trip、 後半の実施、成果発表

▲表1 PBLの全体のスケジュール

したとAnn先生から伺っています。今後は、より活発なPBLにするために定員を超えた場合の選抜として面談をすべきと考えています。

本PBLは日本とタイのそれぞれ10日間だけがPBLの内容ではありません。7月下旬のチーム分けでKMUTTの学生にチームのペア結成を呼びかけるプロジェクトの提案書作成が実質的なPBLの開始となります。また、KMUTTへの派遣PBLが終わったときから、それに続く本学の受入PBLが開始するまでの期間も、PBL後半で完成を目指すために各チームにはお互いに連絡を取りながらプロジェクトの内容を各大学で引き続き進めてもらいます。そのためほぼ4ヶ月弱、PBLに関わってもらうこととなりますので、十分な教育効果を与えることができると考えています。受入となる後半のPBLでは実演を交えて最終発表が行われますが、派遣と受入の間に1ヶ月以上の時間を設けることにより、成果物の完成度が高いチームが現れております。



▲KMUTTでのPBLの様子

## 芝浦の最終発表ではGTI参加企業も参加

本PBLでは「マイコン」、「生体」、「センサ」、「制御」、「光」をキーワードに学生がゴールを話し合って決め、実演可能なシステムを作り上げます。この2年は、学生がインターネット上の情報だけをもとにゴールを決定することなく、また、目指すゴールの社会貢献が明確になるように、本学が主体となって運営しているGTI参加企業である株式会社高見沢サイバネティックスの協力をいただいています。PBLが始まる前に本学科の学生が具体的な提案書が作成できるように、テーマのヒントとなる説明会を本PBLに関わる教員と高見沢サイバネティックスの技術者の方々が参加し、参加学生対象に開催しています。また、説明会にはAnn先生も参加し、PBLの内容の方向性を事前に確認できるようにしています。Ann先生には専門科目「先端技術」で講義をしてもらい、それに併せて説明会の日程を決定しています。

KMUTTの学年暦は本学と比べて4ヶ月遅れて新学期が始まります。そのため、KMUTTの学生は2年生の講義終了後の長期休暇中に参加のための選考面談を受けます。そして、3年生になったばかりのところで本学学生から企画書が送付されて、チームを決めてもらうこととなりますが、今のところ大きな混乱は生じていません。学年暦の違いは双方向PBLでは非常に大きな障害となることがあり、本学ではなるべく講義に支障が出ないような日程で設定しています。そのためKMUTTの学生は派遣と受入の際は講義よりPBL参加を優先し、その前後で定期試験を受けている状況で、かなり負担がかかっていると思われます。それでも多数の学生が応募してくれているのはAnn先生がENE学科の理解が得られるように調整しているからだと考えています。実際、KMUTT実施のPBLでは最終日に行われる中間報告に学科主任をはじめ、複数の教員の参加をいただき、学生が助言を受け、その後のPBLの進捗に反映されるようになっていきます。

また、本学実施のPBLでは最終発表会に学科教員に加えて、高見沢サイバネティックスから研究開発に携わる技術者の方々が参加され、学生に対して積極的に質問していただ



▲本学でのPBLの様子

たことで、学生は大きな刺激を受けるとともに企業の考え方を理解したと思われます。2017年実施時には最終発表会におけるプレゼンテーションやプロジェクトの成果に対して終了後にコメントをいただきました。その一つに「企業での研究開発では考え付かないような方法を用いて問題解決を行ったグループもあり、とても新鮮であった。たとえば、人感センサの堅牢性向上のために、使用時に付着した障害物(葉、ゴミなど)を風で吹き飛ばす方法を提案したグループがあった。この問題に対し、企業は通常センサの性能を向上させようとする。センサの性能向上よりも、センサの本来の機能を確保するために障害物を除去するのが本筋かも知れず、学生の採用した方策には改めて考えさせられた。」というものがありません。このような企業からの貴重なご助言を今後のPBL発展に役立てていきたいと考えています。

## 最後に

この科目の始まりは、言うまでもなく本学がスーパーグローバル大学創成支援事業に採択され、各学科で海外派遣人数を100%に近づけることが目標になったことがきっかけです。今後、海外派遣プログラムに参加する学生がさらに増えるよう新たな試みを考えて行きたいと思っています。最後に、本PBLを進めるに当たり、電子工学科教員の方々、国際部のスタッフの方々に多大なるご理解とご協力をいただきました。ここに改めて感謝を述べさせていただきます。

## Scomb利用事例紹介ワークショップについて

※Scomb(スコーム)は、本学が導入したLMS / ポータルサイトです。

システム理工学部 数理科学科 石渡 哲哉

本学にLMSやコミュニケーションツールなどの機能を持つ学習支援システムScombが導入され、多くの教職員・学生が密度の違いこそあれ、触れる機会が増えています。しかし、実際このような新しい「道具」が用意されても、いろいろな機能を試す余裕もなく、またどのようなことがどうすれば実現できるのか、どの程度の作業量かが見積もれず、利用に二の足を踏んでしまうことも多いと思います。この導入時の負荷をゼロにすることは出来ませんが、まずは利用事例を紹介し、その試行錯誤の体験を共有しよう、ということで昨年9月21日にIR部門主催のワークショップを開き、4つの事例紹介をしていただきました。Scombの機能を網羅的に解説するものではなく、各先生方が実際の場面でのどのように使っているのかの事例を蓄積し公開・共有することで、同じようなことをやってみよう、と思ったときに参考にできるのではないかと考えています。以下その内容について簡単に触れます。

山田純先生には、ネットワーククリッカーを利用して講義中に内容確認の小テストを行う際の実際の設定画面の解説や、設問の仕方における工夫についてお話しいただきました。自動採点機能で教員の負荷を減らすこともできますし、双方向性があり学生の理解度をすぐに測れるこの取り組みは、いろい



▲Scomb画面(一部)

ろな科目で参考になると思います。角田和巳先生には、Scombの科目ルブリックを使って学生による達成度等の自己点検を行った事例紹介とコミュニティを使って研究室の情報共有を行い、研究成果や資料を時系列に沿って蓄積できることで研究の進捗管理が行えること等についてお話しいただきました。管理や状況の可視化が統一したプラットフォームでできますし、特に後者は研究室での利用なので実験的な導入がしやすいのではないかと思います。長谷川忠大先生には、ダッシュボード機能で学生たちのどのような情報が確認できるかの説明を頂き、父母懇談会で効果的な情報提示ができたことを報告いただきました。ダッシュボードについて

は今後も表示項目が拡充されることで、今後いろいろな場面での情報確認・提示に利用できると思います。最後に、私からこれまで別のシステムで年度初めに行っていた学科学生の意識調査・振り返りのアンケートを、Scombのコミュニティー機能を使って実施した事例を紹介しました。1年前に答えた内容を参照する、ということが実装できることが分かりましたので、同様の利用法が他でもできるのではないかと思います。



# Workshop Report

## シラバス・授業デザインWSに参加して

麻布大学・学長補佐(教務・新教育プログラム担当)

関本 征史

大学教育の根幹は授業であり、それを説明するものがシラバスであるという認識はありましたが、きちんと勉強する機会がないままでした。昨年6月から本学(麻布大学)教務の責任者となるにあたり、まずは自分自身が学ぼうと決意し、本WSへの参加を決めました。いずれのWSも実践的で、自分自身のシラバスや授業内容を見直す良い機会となりました。本学の他の教員にもぜひ経験してもらいたいと思い、シラバス作成WSを担当された奥田先生に相談したところ、ご快諾をいただき、昨年12月に本学でもWSを開催しました。本学のWSでは、通常のFD講演会の倍以上の参加があり、自分自身のシラバスや教育に新たな「気づき」があったとの感想が参加者の多くから寄せられました。今回の経験はきっと、本学の教育改善に大きく役立つものと思います。このような機会をいただいた、シラバス・授業デザインWSの関係各位に深く感謝いたします。今後ともよろしく願いいたします。



## デザイン能力を育成する 授業設計ワークショップに参加して

東洋英和女学院大学 国際社会学部国際社会学科 専任講師

町田 小織

マルセル・デュシャンの「泉」をご存じですか? 本WSを経験した後、「マルセル・デュシャンと日本美術」展(東京国立博物館)にて作品を鑑賞しました。WS後だからこそその気づきや学びがあり、それに伴いWSそのものの体験価値も向上するというシナジーを経験しました。

本WSでは、フォトKA法を用いて、普段意識していない日常の出来事を、ユーザーの視点になって改めて考えてみます。それを「ユーザーの心の声」として表現し、価値を生み出し、最終的に価値マップを作成。そのプロセスは、デュシャンの「価値の転換」のようでもあります。WS冒頭、デザインとアートの違いについての解説がありましたが、「美術の真の作者は鑑賞者」であると主張したデュシャンに関しては、体験価値を想定していたともいえるのではないのでしょうか。

学生にとって「意味のある授業」という体験価値を提供する立場にある教員は、すべからずデザイン能力を身につけるべきだと再確認したWSです。



## Workshop for Teaching Subjects in English に参加して

国際基督教大学 特任講師

恒安 眞佐

昨年11月17日、芝浦キャンパスで開催されたWorkshop for Teaching Subjects in Englishに参加しました。まず、参加者同士の交流を深めるため、ホートン先生はウォーミングアップから始められました。この活動は、教員・学生間の関係を円滑にし、導入時期や対象者を問わず、あらゆる環境にも適用できると思えました。その後、大学・グローバル化の概要、英語で授業を実施する意義、そして英語で教科を教えるアイデアやクラスの雰囲気を作る工夫を共有してくださいました。英語で教える難しさや不安要素の意見交換を通して、自分の授業や英語教員としての役割を振り返る貴重な機会も得ることができました。

貴センター主催のセミナーに参加させていただいておりますが、毎回思うことは「雰囲気がかい」ことです。講師やスタッフのきめ細かい心遣いが感じられ、落ち着いた環境の中で多くの事を学べる機会はとても貴重です。今後も研鑽を積みしたいと思います。



# 2017年度優秀教育教員顕彰について

2017年度優秀教育教員顕彰選考委員会委員長 木村 昌臣(工学部 情報工学科)

例年同様、2018年4月5日に大宮キャンパス齋藤記念館において、FD・SD講演会および優秀教育教員の顕彰が行われました。今回は下記の4件に対して教育賞の授与が行われ、さらにその内容についての講演が行われました。本学で強力に推進されているグローバル化と関係して、今回の受賞4件のうち3件はグローバルPBLに関するものでした。グローバルPBLは、海外の協定大学に所属する学生と本学の学生の混成グループにより課題を設定、解決していくものですが、授業科目に紐づけながら、様々な工夫が凝らされ、さらにその効果についても適切に評価されていました。また、もう1件は、学習サポート室の活用促進についてであり、学修に苦勞している学生こそ利用すべきだが実際には利用しないジレンマを解決する工夫としてその意義が評価されました。

参加者のアンケートでは、「gPBLの実施に関するノウハウが大変参考になった」「海外との取り組み方、その視点について学ぶ機会となった」「今後、事務方としてサポート、学生への案内をしやすくなった」「学習サポート室と授業のリンクは今後の一つの方向を示していると思われまます」など、発表に対するポジティブな意見が大半を占め、発表からよい刺激を受けたというコメントが多くみられました。

その一方、運営に関しては「それぞれの内容、構成がバラバラであるのは情報共有という意味では残念であった」などの工夫・改善を求めるコメントもありました。また、自分のほうがよい授業をしているというコメントもありました。ぜひ今後の教育賞に応募し、その成果を共有いただきたく思います。

## 2017年度優秀教育教員

所属学部	氏名 所属学科(職位)	該当分野	標題	授業科目 (優秀な授業の場合)
工学部	小池 義和 (電子工学科) 横井 秀樹 (電子工学科) 加納 慎一郎 (電子工学科)	優秀な授業	専門科目「電子工学国際インターンシップ2」におけるタイ・日本間の双方向グローバルPBLの実施	電子工学国際インターンシップ2
システム理工学部	長谷川 浩志 (機械制御システム学科) 渡邊 大 (機械制御システム学科) 伊東 敏夫 (機械制御システム学科)	優秀な授業	専門科目「創生設計演習」でのハノイ工科大学におけるgPBL実施	創生設計演習
デザイン工学部	廣瀬 三平 (デザイン工学科) 香川 智修 (教育イノベーション推進センター) 中川 貴裕 (教育イノベーション推進センター)	優れた教育改善活動	デザイン工学部の数学教育における授業と学習サポート室の連携	
工学マネジメント研究科	加藤 恭子 (工学マネジメント研究科)	優秀な授業	プロジェクト演習での、ThailandにおけるKAIZEN活動を題材としたgPBLの実施	プロジェクト演習1・3



## 2018年度 教育イノベーション推進センター主催/共催 研修および講演会

実施日	実施内容
2018/4/5	FD・SD講演会および優秀教育教員顕彰
2018/4/7	2018年度新任教職員研修
2018/5/26	ルーブリック評価入門WS
	反転授業入門WS
2018/7/1	TP完成WS・AP完成WS
2018/7/7-7/28	ドラムサークルによるチームビルディング
2018/7/7	英語による授業のためのスキルアップ研修
	研究室指導に必要なコーチング技能入門
2018/8/1~2	TP作成WS・AP作成WS
	授業デザインWS
2018/9/6	授業外学修を促すシラバスの書き方WS
2018/9/13	学生主体の授業運営手法WS実践編
2018/9/21	LMS普及のためのWS

実施日	実施内容
2018/10/20	研究内容を分かりやすい言葉で伝えるためのWS
	産学連携の知的財産マネジメント研修
2018/11/16	FD・SD講演会「カリキュラム評価の意義と方法」
2018/11/17	英語による授業のためのWS
	デザイン能力を育成する授業設計入門WS
2018/12/13	理工系におけるグローバルPBLの新規設計と運営のノウハウを学ぶ研修
2018/12/15	IoTのためのPBLと教材事例
2019/2/23	実験・実習の授業設計入門WS
2019/2/25~26	TP作成WS・AP作成WS
2019/3/6	授業外学修を促すシラバスの書き方WS
	授業デザインWS
2019/3/20	学生主体の授業運営手法WS・実践編WS
2019/3/26	PBLに活かすプロジェクトマネジメント講座

2019年度も同様の研修、講演会を実施します。研修等の情報はQRコードからメーリングリストにご登録いただくと、随時ご案内いたします。

